

明末清初才子佳人における地理的イメージについての研究

朱 焱

一、本研究の研究対象

明末清初才子佳人小説とは明末清初という特定の歴史時期に創作された男女の婚姻を主題とする白話章回小説である。明末清初才子佳人小説にはいくつか特徴がある。まず、題材について、才子と佳人の恋愛・婚姻を題材としている。また、人物のパターン化も明末清初才子佳人小説の共同の特徴である。さらに、物語展開のパターン化も明末清初才子佳人小説を特定の小説ジャンルと定義するための重要な要素である。

これらの先行研究に基づき、本論文の研究対象である明末清初才子佳人小説の時間範囲は明の崇禎から清の乾隆までの間（1631–1786）とした。本稿が取り扱う作品は、孫楷第氏の『中国通俗小書目』と大塚秀高氏の『中国通俗小説書目（増補）1987年版』を土台に、柳存仁の『倫敦所見中国通俗小説』及び韓錫鐸等が編纂した『小説書坊録』、欧陽健等が編纂した『中国通俗小説総目提要』、または近年周建渝、顔采容、蘇建新などの研究者による研究成果を参考しつつ、崇禎四年（1631）に出版した『鼓掌絶塵』から乾隆五十一年（1786）に出版した『離合劍蓮子瓶』に現存する六十種の小説を研究対象とした。

二、先行研究と問題の所在

本稿では、明末清初才子佳人小説における地理的イメージと物語構造のかかわりをめぐって考察を行った。このテーマに関する先行研究は主に二種類に分けられる。まず類型学と物語論の方法を用いた研究では、物語構造のパターン化、人物像や題材を中心に分析を行っている。しかし、才子佳人小説における地理描写から小説構造を分析する研究はまだ不十分である。

もう一つの地理文化史の視点から、才子佳人小説における地理に着目し、その文化価値を掘り出し、才子佳人小説を地域文化の資料として扱っている研究である。その多くは地理要素を才子佳人小説の成立の外因として研究しているが、地理要素を小説構造の重要な内部要素としてはまだ検討されていない。本研究では、才子佳人小説は旅に関する小説と考え、地理要素は主人公の旅の方向を決定し、小説全体の物語構造には非常に重要な役割を果たしていると論じた。

三、本研究の視座及び意義

本稿の発想は明末清初才子佳人小説を旅の視点から、地理イメージが才子佳人小説の構造にどのような役割を果たしているかを研究した。本稿では、才子佳人小説が旅に関する小説であると考えた。ほとんどの明末清初才子佳人小説に登場する主人公が旅をしているからである。まず、主人公は科挙試験を受けるために旅に出る。また、主人公は佳人を求めために旅をする。つまり「出世」と「結婚」が才子の二大人生目標である故、それを達成するために旅に出なければならない。従って、本稿では、明末

清初才子佳人小説は旅に関する小説のジャンルであると考え、地理の視点から、主な登場人物の旅のルートにおける地理的イメージを考察し、そして地理的イメージは物語構造にどのように影響しているかを検討した。

四、本論の構成

本稿の発想は旅の視点から、明末清初才子佳人小説における主人公の旅の方向とルートといった地理的要素は小説の物語構造にどのような役割を果たしているかを研究した。これを踏まえて、主人公が旅する途中で起きた出来事とこれらの出来事が発生する時間に注目し、本論の構成を才子佳人の出会いシーン・遭難シーン・手柄立てシーンに分けて、全体的規律の探りと特例の討論を行いながら、それぞれのシーンにおける地理的イメージを考察して、地理的イメージと物語構造との関わりを明らかにした。

第一章は明末清初才子佳人小説における主人公の旅行ルートを地図化し、旅の方向及びルートの全体的な特徴を分析し結論を得た。まず、すべての小説には空間移動が存在している。それに加えて、空間移動の範囲が非常に広大である。また、旅のルートはパターン化する傾向がみられる。才子は基本として「出身地→都→奉旨帰娶地」のような空間移動のルートを辿るが、地図からは「北上→南下」のように見える。六十種の作品のうち、そもそも主人公が科挙試験を受けないまたは才子の出身地が都であるといった特殊な設定の作品（合計八種）を除けば、残りはすべて上述のパターン化したルートである。最後に主人公の空間移動は物語の時間軸と関係性がある。具体的には、主人公の結婚と出世を手掛かりに、主人公の移動時間を軸として、彼らが遊歴途中の見聞、人との交際をストーリーの中に織り込み、最終的に整った物語構造に至っている。

筆者は才子の移動ルートに着眼し、具体的なシーンとそれぞれの発生地の間関わりを考察した。結論として、旅途中での出来事の舞台は決してランダムに決められるのではない。まず、小説家が才子と佳人の出会いの地を選ぶとき、江南地域を舞台とする傾向がある。佳人が二人登場する場合、一人目は江南出身、二人目は山東出身なのは一般的である。科挙試験のために才子が上京する途中では、長江と運河で遭難する。そして内陸山岳地帯（広西、四川、広東、山東、陝西等）と東南沿海地域及び海外（いわゆる「辺境」）で手柄を立てる。上述のような一定の法則をもとに、第二章から第五章では物語の時間軸から、主人公が旅途中の出来事を出会いのシーン、遭難シーン、手柄立てシーンに分類し、それぞれの発生地に対してどのような地理的イメージを持っているかを考察した。

まず第二章は才子と佳人の出会いの地、つまり江南地域の自然環境と人文環境に注目し地理的イメージを分析した。江南地域の自然環境を代表する蘇州虎邱、江南園林、杭州西湖は濃厚な文人的色合いがあり、高潔な品性を持つ主人公の人物像を作り出すところに役に立つ。人文環境については江南の寺廟が物語構造に大きな役割を果たしている。寺廟は才子の「尋芳」（結婚相手探し）に情報を提供する地であり、才子と佳人が出会うようになる機会を作っている。

第三章は「双美縁」パターンを地理的観点から探究し、第二の佳人との出会いの地・山東に対する地理的イメージを分析した。山東には儒家の名所旧跡が多くあり、山東に関する描写では儒家の美德を備えている理想的な佳人像を作り出している。

第四章では遭難シーンの発生の長江と運河の地理的イメージを明らかにした。長江と運河は、水路交通がメインになっていた明清時代商人の貿易には非常に重要な地理的位置を占めている。そのため、水難も多発している。才子が水難に遭難する前と後の空間転換によって、小説のプロットも著しく転換

している。

第五章は手柄立てシーンの舞台・辺境に注目して、その特徴を分析した。辺境は古代中国の中心地域から遠く離れ、小説の中では、常に妖異さ、反乱多発といったネガティブなイメージを持っている。手柄立てシーンの舞台を辺境に設定することで、反乱を鎮めるために極めて危険な辺境へ行き、どれだけ困難があっても乗り越えられるような英勇な才子像を作り出している。

五、総論

本稿では、地理的視点から明末清初才子佳人小説に考察を加えた。明末清初才子佳人小説は「旅」に関する物語という結論に辿り着いた。

ここまでの研究は才子佳人小説における地理的要素を文化論の資料として扱われてきたが、本研究は旅という視点から、主人公の空間移動に注目し、地理的描写は外部的な要素ではなく、内部的な物語構造に深く関わっているという結論を出した。具体的にいうと、主人公は「結婚」と「出世」のため、必ず旅に出る。しかし、その旅先はランダムに決定されるのではなく、各地域の地理的イメージによって一定なパターンを形成させている。「結婚」と「出世」をめぐる一つ一つの出来事を時間軸とし、主人公が移動する旅先を空間軸としたら、この時間軸と空間軸にはつながりが見えてくる。一般的には、第一の佳人との出会うシーンの舞台は江南に設定される。第二の佳人はとの出会うシーンの舞台は山東に、遭難シーンの舞台は長江と運河に、手柄立てシーンは辺境に設定されている。明末清初才子佳人小説における地理要素はこのように物語の展開と密接に繋がっていることが明らかになった。江南地域に関する地理的描写は才子と佳人の出会いシーンを展開されている。山東の儒家の名所旧跡についての描写は、儒家の美德を備えている人物像を作り出すのに役に立っており、才子と第二の佳人の出会いの手掛かりも提供していることが分かった。遭難シーンの舞台は長江と運河流域であり、水路貿易が発達していたため、水難が多発した。水難事故の発生前と発生後の空間地理の転換に伴い、小説のプロットも著しく変化することが明らかになった。手柄立てシーンの舞台はおおむね辺境及び海外といった中国文化の中心地を離れた地域であり、地理的距離の遠さと地形の険しさなど極めて困難な状況が英勇な才子像を作り出している。明末清初才子佳人小説における地理的要素は、上述のように物語の展開と密接に繋がっていることが明らかになった。従って、明末清初才子佳人小説は「旅の物語」と言っても過言ではない。